

平成20年度第3回公立大学法人秋田県立大学経営協議会
議事要旨

1 日時：平成21年3月25日（水）15：00～17：00

2 会場：秋田ビューホテル 5階 「百合の間」

3 出席者

（委員）

佐々木委員、種市委員、根岸委員、吉村委員、渡邊委員、
小林理事長、柚原副理事長、新岡理事、森理事、駒野理事、竹村理事

（監事）

倉田監事

（事務局）

伊藤次長、佐々木統括、渡辺チームリーダー、高橋チームリーダー、小野チームリーダー、
中泉チームリーダー、鈴木シニアスタッフ、畠山職員

4 議事

定款の定めにより理事長を議長として会議が開催された。

（1）定款に基づき経営協議会の議を経る必要のある事項について

1）平成21年度年度計画について、柚原副理事長より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

秋田市と姉妹都市というのが、結構たくさんある。知名度を高めるということと連動しているのでは。

今秋田市とは連携協力協定を結ぶことで調整をしているところだが、ちょうど市長が退任されたので、ちょっと棚上げになっている。新しい市長が誕生した暁には、また進めさせてもらおうかと思っている。

大学院の後期課程の充足率は十分満足されているのか。

残念ながら。学部の方はまだ競争率が4倍近くなので非常にハッピーだが、大学院の方は非常にミゼラブルである。極言すれば、定員が多すぎるのではないかという話もある。県内での高等教育に対する意識の問題であるとか、あるいは父兄の経済的な問題であるとか、大学院の入試と就職活動の時期の相対的なズレとか、いろんなことが指摘されている。一番改善する手だてとしては、特に学内の学部学生に対して大学院がどういうところであるかというのが見える形にするのが非常に大事だろうと。研究室のアクティビティ、受け身だけでなくこちらから能動的に研究することの楽しさ・うれしさというのを見える形にしようじゃないかということで、教員たちに対して強く働きかけている。これはかなり時間がかかる問題だと思う。

充足率はどのくらいなのか。

4月1日を想定すると、システムは1年生から3年生まで足して、定数は24名だが、充足は19名である。生物は、30名に対して12名。生物の方は3割強、システムの方が7割くらいである。

文科省も9割を超えないとだめだと言っている。予算的措置が講じられないので。

我が方も県から強く叱られているところがある。先ほどの報告にあるように、ひとつは経済的なバックアップをしようとRAを新設した。それから、特待生制度の枠を学部を減らして大学院の方を増やした。これは両方とも経済的な意味での援助になると思う。社会人がもう少し確保できればと思っているが、なかなかそこまで行かない。

ドクターは社会人はなかなか難しい。

開学のころは、県庁とか自治体（農業試験場とか）の方がドクターに入ったというのがあったが、最近は大体、学位取得者がそろっていて、なかなか増えてこない。

文科省は今、後期課程の定員の見直しをかなり進めようと言っているので、過去何年間か充足率が非常に悪いという場合は、やはり定員を下げるしかないかなと思う。

なんとなくそれが一番安易でかなり屈辱的措置という気がするので、あまり取りたくないが。

県内企業の公募が遅いということについて、だいぶ良くなったはずだが。結局、新しい期に入ってから事業計画で予算を作ってもしょうがないので、新しい期に入る前にきちんと予算と事業計画を作って、そうすれば募集も早くなるということを使うのだが、やっぱり秋田はほとんど中小企業だから、なかなか実際はそうはいかない。それからインターンシップも問題についても、何週間がいいのかという微妙な議論があるが、むしろ学生よりも企業側でマニュアルを与えて。

就職活動をもっと前倒しにして欲しいと言っているが、本質的にはまずい。3年生の初めから就職の話をしていると、あとの勉強が気もそぞろになり、青田買いみたいになってしまう。かといって県外の企業がいいのを先に採ると、大きな意味でもっとまずいだろうと思う。

県外企業が早すぎる。

この頃規制するというような話もあるようだ。

2) 平成21年度予算について、柚原副理事長より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

21年度までは、なんとかしのげるという目処をつけてやっているが、その先こんな調子で減額されていったら、いずれ数年後にはどうしようもなくなるという感じがしている。3.数%とか4%というのは国立大学の1%に比べて結構大きい。

国立ももうちょっと下がっている。1.数%くらい。4%は大きい。

その分、外部資金や文科省の補助金を確保したりしてなんとかしのぐことになる。

3) 平成20年度予算の補正と決算見込みについて、駒野理事より説明があり、了承され

た。

- 4) 事務局体制とプロパー職員の採用について、竹村理事より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

参考のために、派遣職員とプロパー職員との賃金格差は。

プロパー職員が県職員をオーバーすることはないと思う。毎年改定される県職員の給与表を参考に決めている。

県職員の方は県にいたときと同じか。

同じである。

- 5) 定款の変更について、柚原副理事長より説明があり、了承された。

- 6) 規定の制定及び改正について、竹村理事より説明があり、了承された。

- (2) 平成20年度第2回経営協議会(H20.11.26)以降の学内外情勢について

- 1) 教育ローン利子補給金交付制度について、森理事より説明があった。

- 2) 入学者選抜(学部及び大学院)の状況について、森理事より説明があった。

- 3) 卒業生の進路(就職・進学)状況について、森理事より説明があり、次のような質疑応答があった。

経済状態の悪化で、新聞等で全国的に内定取消が増えているという報道があるが、本学では1件で、その学生は大学院進学に切り替えた。

県外出身者は戻るのか。

例えば、愛知とか静岡から来た人はほとんどが戻る。あと、本学の受験者で一番多いのは当然秋田県だが、2番目が栃木である。これはほとんど関東に帰るのが多い。それから栃木から来る人で大学院進学希望の人が多く、東京の大学院に行くのがこの中に結構含まれている。本学の受験者の2位は岩手県だったが、今は3位に。4位に愛知県が来ている。

入学者のうち3割くらいが県内出身者だったが、今年は3割を切りそう。卒業生のうち県内就職者は25%くらいだった。今年の初めての試みとして、県内企業の方に来てもらい学生に対する説明会というのを行ったが、もう今年は採らないよという感じではなくて、前向きに対応してくれた。

- 4) 由利本荘市・にかほ市・大潟村との連携協力協定について、新岡理事から説明があった。

5) 秋田大学・国際教養大学との連携協力協定について、柚原副理事長から説明があった。

6) 10周年記念事業について、柚原副理事長から説明があった。

7) 業界団体と学長との情報交換会について、森理事より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

一番ハッピーだったのは、これまで6回の卒業生を出して、概ね苦情はゼロで、非常に良くやってくれているとお言葉をいただいた。これは1回きりではなく、連続してやっていきたいと思っている。

来年の卒業生の就職はきつそうか。

今年を見ていても、特にきついとは思えない。今年度から初めて秋田県内企業との面談会をやったが、28の会社に来てくれた。業者の人も今の時期にこれだけの会社に来てくれるなんて、驚きだと言っているくらい。まだ新聞に出ているようなことは起きていないんじゃないかというふうに思う。楽観かもしれないが、来年度もそんなにきつくはないんじゃないかと思う。それから、先ほど学長から一人内定取消があったという話があったが、実際には、その子自身はいくつかの内定を持っていたりするので、実質的には影響はなかった。対象とする企業がどちらかと言えばそんなに大手ではないので、そういう影響を受けるのではないかと思うが、意外と受けてない。

自動車産業みたいな大きいのがあるわけでもないし、IT関係も、TDKがあるが、世の中で言われているようなダメージを受けている会社がないというのが効いているのかもしれない。しかし来年は蓋を開けてみないとかわからない。

我々のところは、医学部はほとんど就職が関係ないので、あと工学も結構就職はいいが、教育のゼロ免が心配である。

TDKが今受注率が40%切っているというので、関連のMCCも含めてこのところ5~6人採用してもらっていたが、この辺がどうなるか。

自動車関係の派遣切り、正規の職員の解雇まで来ているが、最後は資格がものを言う。その人でなきゃならない、という人は絶対残る。従来はなんとなく専門高校が嫌われて、普通高校がいいというのがあった。今ここに来て、そうも言ってもらえないような状態になった。普通高校を出てこれといった意志もなければ資格もない、となると、非正規のバイトみたいなものしかないといったようなことが今後一層強まるようなので、そう意味では、農業・工業・商業を中心としたいいわゆる実業高校の新たな見直しの時代がまもなく来るのでは。今まで日本というのは、アメリカの経済の余力で救われてきたところがあるが、今はそんなことは言っていられない。新たなる専門教育というのがまた来たなと思っている。

専門的な商業高校や工業高校が狙われるようになってくると、大学はどうなるのか。

普通高校はどうにもならないというか、扱いにくいというか。職業高校をどうにかできないかというのが強くて、総務省あたりのプログラム要望が出てきている。文科省もそういう方向で活性化みたいなのをやろうかという話が結構増えてきている。いろんな水準の技能があるだろうから、県大がどうだっという話にはならないと思う。結構具体的

なプログラムで自治体から上がってきているというのがひとつの現実。

うちの学生でも、何のために大学に来ているのかわからないのが結構いる。職業訓練的な意味で、秋田高専からもっと編入で来てもらいたい。モチベーションもはっきりしているし、100%県内出身者であるので。我々の方の単位認定のバリアを下げるということを決めてスタートしている。私たちのところは、農学部と工学部だから、県内の農業高校と工業高校ともっと緊密にやってもいいんじゃないかと。要するに、一般高校の進学校ばかりを相手にしているのはあまり賢明な策ではないのではないかと感じている。

またさらに新たな専門学校を作るというお金はない。普通高校の中に専門高校の教育システムを導入させるとか。A普通高校の生徒が近くのB工業高校にちょっと行くとか、あるいは教員に来てもらうとか。子どもたちは学校行事なり、集団生活の喜怒哀楽がメイン。ほとんどが友情とかで、授業のこととか専門性をどうこうとかは皆無。高校の3年間を部活とただ両立しましたということで、それが汎用的能力として、部活を中心とした人間関係というだけで、今の厳しい現実とは全く関係なくやっている。だから今のようなギャップに対して脆いと思う。教育課程上、技能訓練とかを接近させざるを得ない。

日本の学生で一番張り切るのは学園祭のときだという。そういう傾向は秋田だけじゃなくであるようだ。

森先生と2年連続で職業高校のプロジェクト研究発表に行っている。みんな前向きな取組で素晴らしい。プレゼンも非常にうまい。そういう素晴らしい、伸びそうな学生がいるが、結局試験は成績である。数学とか理科とか英語の点数でいくと、どうしてもそこがギャップになってしまう。いくつかの推薦をやっているが、その合否の判定をもっと考えてもいいんじゃないかと思う。

(3) 今後の法人及び大学のあり方について

1) 本学の英語教育のあり方について、森理事より説明があり、次のような質疑応答が行われた。

英語のクラス分けはどうなっているか。

学科で分かれている。

能力別というのは関係ないのか。

関係ない。3年生くらいになると、英会話とか構文、英語の文章を読むクラスとか別途分かれていく。1年生2年生は必須。

秋田大学は習熟度別クラスを何年か前に導入している。

教員にとっては負担が増えないか。

具体的な現状は知らないが、プレメントテストというのをやって、点数でクラス分けをして、英語の授業の内容にレベルをつけて教育をしている。

一般社会人としてのあるレベルの会話の能力がいる、ということと、この頃マニュアルでもなんでも英語で書かれているものがあるので、ちゃんとした文章が読めて理解できる能力が必要だという意見があって。これを一緒にやっていいのか、別々にやったほうが

いいのか、いろんなことを議論しなければならないと思う。

補習授業はやっているのか。

入学してきたらすぐに英語のテストをして、基礎能力が足りないという者には英語の基礎講座に入れという程度しかやっていない。強制ではない。

企業が求める英語の能力というのは、業種とか規模とかによって違うから、なかなか難しい問題。私どものところは実際は片言で結構。

大学院の試験は全部英語があるのか。

ある。

あとは、こっちの提供能力との関係で処理するしかないのでは。ガイダンスみたいな話を、どういうふうに最初にインプットするかというあたりから攻めていって。あらゆる人数に応えるというのはなかなか実際問題不可能な話で、大学としてやるべきことは、ひとつは、マスターに行く人たちは、必ず外国語についてはこれをやるということ。大学院に行く子については、選択科目があるのであまり心配はしてないが、実際には吹きこぼれというのは結構早めからきている。例えば、1年生のときでもTOEIC 600点を取ってる子にとっては、英語の授業は遊びになってしまう。そういう子が英語を必須科目で取るというのは苦痛であるから、早めに救いあげなければならない。

専門的な高等学校から来る子たちの入り口でのバリアというのが難しい。

上層部はすごいレベルである。あの子たちであれば、英検の準2級とかを条件にしても、挑戦すると思う。「あれば望ましい」くらいの表現でやれば。

英検準2級があればもう英語の試験はいいよということか。

あればより優位だということで。カリキュラムが非常に不利。1単位とか2単位とかしかない。

推薦Aでは英語をあまり見ない。英語のバリアで落ちているということは考えていない。そのバリアはつけないほうがいい。いいと思う子は一本釣りで推薦だけで取る方をやりたい。そういう子たちが、英語を気にしなくても卒業できるように、必須を減らすとかした方がいいんじゃないかと。

なるべくそういう工夫をしながら、英語を好きになってもらわないと。

やっぱりモチベーションが高いのを優先するというのが必要なのでは。

プレゼンしている子たちはやっぱり生き生きしている。そういう人をうちに推薦してもらうように、なにか仕組みを考えなくてはと思っている。

英語の問題は学内でも議論が始まったところで、今日いただいたご意見も十分インプットして、進行状況をお知らせしたい。

2)の学内競争的資金に関連して、「研究活動から生まれた実用化事例」について新潟理事より説明があった。

以 上